

彼女

天から授かった母性が彼女の豊かな胸に満ちている。

幼い口を懸命に動かし動かし動かし乳首を吸ういとし子を、彼女は目を細めて見守る。大事な大事な私の息子。たくさん飲むのよ。もつとたくさん。いっぱい飲んで大きくなるのよ。パパみたいに。

母親の思いが伝わるのか、幼子はさらに強く吸う。痺れるような母性の歓びが彼女の広い胸を疼かせる。

ああ：昨日よりも吸う力がまた強くなっている。毎日成長してくれてる。うれしい。一心に哺乳する息子に語りかける。

あなたのパパはね、それはそれは素敵な男性。

強くて、優しく、行動力があつて……。この辺の女性はみんな、ううん、もつと遠くの女性たちもパパの雄々しい姿を見かけては胸を焦がしてたのよ。でも、ママがパパの愛をゲットしたの。そう、あなたはその愛の結晶。

小さくても自分の持ち家。早春の外の空気はまだ冷たいが、この部屋は暖かい。最愛の息子に授乳するこの柔らかなベッドは母子の天国。

滋味豊かな母乳は幼子の小さな胃袋を満たしたらしい。吸う力が弱まり、可愛い目かとりんとしている。小さなまぶたも重くなっている。彼女は微笑んで問いかける。

ぼうや、もうお腹一杯？ ねんねする？

母親の乳首を離れ、小さな丸太のようにころんとベッドに転がった幼子はもう愛らしい寝息をたてている。彼女は息子の頬にキスし、愛らしい無垢な寝顔に見惚れる。

やっぱりあの人に似た凛々しい顔立ち。今日は昨日よりもつと似ている。黒々とした髪の毛の艶も、しなやかな筋肉も。きつと彼にそっくりな、精悍な男性になる。

ぼうや、もう少し大きくなったらママと一緒に散歩に出ようね。二人で世の中のいろんなものを見て回ろうね。パパにもきつと何処かで会えるよ。楽しみだね。

ずっと添い寝していたいが、そうもいかない。この子を育て上げるだけの糧を得なければならぬ。息子の幸せな安眠を妨げないよう、そつと離れた。

家を出た。世の中は平和な静寂に領されている。小鳥たちのさえずり。冷たい風にも匂う早春の甘さ。親子でこの世間のあれこれを楽しみながら散策する日も近い。

いつもの径をゆつくりと歩んだ。樫の大木の脇を通り、斜面を登りかけた。

炸裂音が大気を震わせ、激痛が胸を貫いた。肺に溢れた血が口から迸り、地響きを立てて斜面を転げ落ちた。横倒れになった彼女は、断末魔の苦悶の中で必死に頭をもたげた。

至近距離まで迫ったハンターたちを血走った眼で睨みつけ、あらん限りの力を振り絞り、全身の毛を逆立てて怒りの咆哮を発した。

「大物だ。こんなでかいヤツはめったにいない。いい金になるぞ」

「乳が張ってる。何処か近くの穴に仔グマもいるな。よし、とどめをさせ！」

再び凶弾が放たれた。彼女の逆立っていた毛が萎えた。